

科学する

挑戦

Vol.12

スポーツ科学がもたらした 変化と新しい強化のビジョン

数字は嘘をつかない

——三遠ネオフェニックスの強化のためにスポーツ科学を取り入れた理由は？

浜武(以下浜) 私は、4年前まで精密工具を開発していたエンジニアでした。髪の毛より細かい穴を開ける工具などを作っていて、小数点より右の世界で生きていたので、もともと「数字やデータは嘘をつかない」という意識が強いんです。フェニックスの社長になったとき、もちろん、気合や根性も大事ですが、それだけではなく、選手の能力や必要能力を数値化することで、指導者にとって強化のベースとなるものを作る必要があるのではな

男子プロバスケットボール『Bリーグ』に所属する『三遠ネオフェニックス』(前浜松・東三河フェニックス)。4年前、37歳の若さでクラブの代表に就任した浜武氏は、いち早くスポーツ科学による強化を取り入れた先進的な経営者だ。最先端のスポーツ科学に精通する『アローズジム・ラボ』(浜松市)と提携し、次々に斬新なアイデアを打ち出し行動に移している。ともに世界を見据え、科学を軸にした日本のスポーツ界の進化を考える2人の「イノベーター」に話を聞いた。



スポーツは科学だ。アローズ

ARROWZ

スポーツ科学イノベーター
アローズジム
オーナー
やま した のり ひで
山下典秀

1967年3月18日生まれ。静岡県出身。スポーツ科学全般についての造詣が深く、競技知識も豊富な強化トレーナーとして、シドニー・アテネ・北京五輪など多くの世界大会で日本代表チーム、代表選手をサポート。2011年、科学を駆使した子供のためのスポーツ塾「アローズジム」を創設。研究部門のアローズラボは、プロスポーツチームの強化サポートも行っている。現在、アローズジャパン(株)代表取締役。普及を目指し「スポーツ科学イノベーター」を名乗る。

プロバスケットボールクラブBリーグ
三遠ネオフェニックス
代表
はま たけ やす お
浜武恭生

1975年6月25日生まれ。奈良県出身。株フェニックス代表取締役社長。98年に愛知県の実業団メーカー「オーエスジー」に入社。エンジニア、マーケティング担当として活躍していたところ、3年前に社長に「笑顔がいい」と言われ、OSGバスケットボール部を前身とする「浜松・東三河フェニックス」(当時)の社長に抜擢。選手経験はないが、バスケットボール、スポーツ界全体を俯瞰する眼と卓抜した発想力と行動力で、さまざまな新しい取り組みを行っている。

いかと考えたのがきっかけです。

山下(以下山) 欧州では研究ラボを持つているプロクラブも少なくありませんが、日本ではスポーツ科学が現場でいかされているケースは本当に少ない。自分の能力を総合的に数値で知ることは、五輪選手でさえ難しいのです。その中で、就任してすぐに科学を取り入れようと決めた浜武さんは、非常に先進的で、日本では珍しい方だと思います。

浜 逆にどうして取り入れないのだろうというのが、率直な思いです。私は世界を意識してプロクラブを経営したいと思っています。男子バスケットは40年近く五輪に出場できていません。日本人のあらゆる特性や能力を、

ことはとても大事ですよ。仕事や勉強にも同じことが言えますが、自分の能力と目指すところを知れば、目標から逆算して、何をやるべきかを考えるようになります。バスケットを通じて、そういうことを子供のときに体験できることは、とても良いことだと思います。



10年20年後を見据えた発想

——今後のビジョンは？

浜 やりたいことは沢山あるんですよ。来年、我々は大学バスケットに参入します。浜松学院大学に男子バスケットボール部を新設してフェニックスが全面支援をし、プロのノウハウを強化育成し注入します。文武両道で、勉強

しつかり把握し分析しないと、世界に対してチャレンジヤーにはなれますが、本当に競争に勝つことは難しいでしょう。そう考える私にとって、山下さんが行っているスポーツ科学による強化というものが、ドンピシャとはまったんです。今は経営者ですけど、エンジニアでもありますので、自分もスポーツ科学を研究し勉強したいという思いもありますね。

——以前にこの連載でも紹介しましたが、14-15シーズンにbリーグでフェニックスが優勝をしたとき、それまでの「スポーツアイ」の強化で著しい成果が出ていましたね。

浜 そうですね。バスケットボールは、全員が状況に応じた判断を瞬時に行うスポーツで、

もしつかりやつてもらいたい、人間的にも成長して欲しいと思っていますが、そのために、アローズさんに学生たちのデータ測定をしてもらいます。それだけではなく食事の栄養管理なども取り入れたいと考えています。

山 さらに、学生さんたちにスポーツ科学も学んでもらって、選手として入団してもらっただけではなく、スポーツ科学のスタッフとして活躍してもらおうということも、浜武さんは考えています。10年20年後を見据えたプロスポーツのあり方を考えられている。3年後には、日本では今までなかった機能を備えた体育館をつくらうとしているんですよ。

浜 スタジアムアリーナを中心としたまちづくり改革としてスポーツ庁のサポートも受けながら、そのモデルケースとして、豊橋市に新しいアリーナをつくる計画をしています。ただの「箱」ではなく、まちづくりを兼ねたアリーナで、アローズさん推奨のスポーツドックや、アスリートのためのレストラン、フィットネスジムなどスポーツを通じて健康に寄与するような機能のあるアリーナができないかと山下さんと考えています。

山 誰も考えないようなことを思いつく、素晴らしい発想力を持つていらつしゃると思えます。トップの方が、先進的なものを取り入れる強い意志を持てば、日本のスポーツは本当に変わっていくと思います。スポーツ界は、まだまだチャレンジをする方が少ない。しかし、浜武さんは、良いと思うものはどんどん吸収し、行動する。私がアローズを立ち上げたのも、それまでの慣習やしがらみにとらわれず、日本を根底から強くしたいという情熱に突き動かされたからです。浜武さんを動かしているのも、世界と闘うためにはどうすればいいか、自分に何ができるかという気持ちでしょう。そこから先進的な発想が生まれているのだと思います。

科学の活用を当たり前前に

——Bリーグの中で、スポーツ科学を取り入れているチームは他にあるのでしょうか。

浜 私は聞いたことがありません。でもそれはアローズさんのような専門機器とノウハウを持ったラボが他にないからではないでしょうか。だから、僕は運がいいと思います。しかも、普通ならトップチームだけを重視しがちですが、山下さんは子供たちへのアプローチ、育成も非常に大事にしています。浜松学院大学や新アリーナについても協力してくださいというお話もただで、本当に私達はラッキーです。

山 運も実力の内でしょう(笑)。何か新しいことをされる方というのは、その情熱で周囲の人たちの心を掴み、動かしていくのだから、浜武さんを見ていてつくづく感じました。私は今まで、五輪やプロスポーツに関わる多くの方と出会いましたが、ここまで先進的で最初からワクワクして「やつてみようか!」とチャレンジなさる方はなかなかいません。スポーツ科学を普及させるには、やはりプロクラブが導入してくれることが一番です。どうしても、現場では技術練習が優先されて、データ測定は後回しとされることが多い中で、フェニックスさんが一番最初に我々のスポーツ科学を取り入れてくれました。そこで実績が出たことで、名古屋オーシャンズさんやジユピロさんも提携していただきました。現場での科学の活用が当たり前になるきっかけをつくってくれたと思います。浜武さんの期待に応えるために、これからどうしたら競技能力が上がるのか、どういうトレーニングをすればより効率的に選手たちの力を伸ばせるか、そのノウハウを提供していきたい。それがスポーツ科学の発展にも繋がると思っています。